

第10回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

【優秀書評賞】

前川 明（社会人聴講生）

「終戦詔書と日本政治：義命と時運の相克」

老川 祥一／中央公論新社(2015 年)

栢澤 大助（市民利用者）

「バフェットとグレアムとぼく：インドの 13 歳少年が書いた投資入門」

アリヤマン・ダルミア／阪急コミュニケーションズ(2011 年)

【佳作】

酒井 佑実（社会学部 3 年次生）

「世界から猫が消えたなら」

川村 元気／マガジンハウス(2012 年)

大草 みどり（法学部 2 年次生）

「入門犯罪心理学」

原田 隆之／筑摩書房(2015 年)

【総合講評】

図書館長 国際教養学部 国松夏紀

2006 年度創設の「桃山学院大学図書館書評賞」、本 2015 年数えて 10 回目、例年通り 4 月末(5 月連休前)に募集を開始し、夏季休暇明け 9 月末に締め切り 49 編の応募を得た。これは第 2 回(2007 年)の 140 編や第 3 回(2008 年)121 編に比べれば遥かに及ばず、寂しい限りであるが、昨年 39 編、一昨年 42 編と比べればまずましな方かもしれない。

ただし 49 編中 11 編が指定書式等の不適合で審査対象外となったのは残念なことである。「40 字×50 行」とか「初版出版後 5 年以内」といったルールに従うことは基本的要件となる。その上で「書評賞応募要項」に従い次の 3 項目が要件となる。

- ① (書評対象本の)内容の要約または概要。
- ② (書評対象本の)良い点や悪い点の明示、それに対するコメント。

③ 文章の読み易さ、表記、文章構成の適切さ。

さらに、筆者が個人的に考える良き書評の要件は、その本を読もうという意欲を掻き立てること。判りやすく言えば、書店に走らせる書評を良しとする。しかし完璧な書評は逆に読む意欲を減退させるというジレンマがある。そこで、適切な例とは言えないが、犯人を明示しないことは推理小説の評の不文律になる。

閑話休題。上記要件を判断基準として 38 編中 11 編が第一次審査を通過し、さらに検討・検認作業を重ね、優秀書評賞 2 編、佳作 2 編を選んだ。最優秀書評賞は、残念ながら今年も該当作なしであった。ちなみに、審査委員会は、筆者を含め 5 学部から各 1 名の委員で構成されている。

前川明氏は老川翔一著『終戦詔書と日本政治－義命と時運の相克』中央公論新社(2015 年)を取り上げられた。何故読もうと思ったのか？から始まって、キチンと章ごとに要約を重ね、その上で「良い点、悪い点の明示、それに対するコメント」がキチンとなされてお

り読んでいて感心することシキリ「これはプロだな」と思ったりしたが、文末「40年前私は政治学科の学生だった」で社会人の方と知れた。(審査段階では氏名等をふせてある)ただし、審査委員から同様の評価する一方で次の様な厳しいコメントも寄せられている。

「難解な内容にもかかわらず、内容紹介が的確に行われている。評価も行われているが、自分の価値観に偏りすぎた評価となっており、書評を読む人への「押し付け」感が否めない。また、一文が長く、読みづらい文章になっている。」この指摘は、要件③に引っ掛かる。さらに、巻頭写真版掲載の「終戦詔書」及び草稿類に関する言及がないのが書評としては不親切と思われる。もっとも、これらの文献のテキスト・クリティークが本書の主旨ではないのであるが。

また、「良くない点」の指摘に関連して3章4章の合体を提言しているのだが、書評としては「3章4章の整理不足」或いはもっとハッキリ繰り返しが多いと指摘すれば十分ではないだろうか。書き換え提言という形の批評とも考えられる。

その一方、「無い物ねだり」、書かれていないことを要求するという形の批評もある。昨年は優秀書評賞を受けた、法学部生、大草みどりさんの原田隆之著『入門 犯罪心理学』ちくま新書(2015年)評に対して審査委員の一人から詳細なコメントが寄せられた。

「(1)評者の本文理解はおおむね正当と認められる。

(2)本文の優れた点の要約も、ほぼ的を射ている。

(3)ただし、評者が「物足りない」として記述している事柄は、本文の主旨に対する「理解の不足」とともに、「無い物ねだり」の感がある。以下に理由を簡単に述べる。

評者は「我々が犯罪行動において単純な思考[犯罪行動を見るときに、単純な因果論や社会的因果関係を一方的に決定要因とみる見方——むしろこのように書き直すべきだろうが……]に陥るまたは陥らないためにはどうすればいいのかについてあまり言及していない。云々」という。

この段落の記述全体から判断すると、評者は、犯罪や犯罪者に対する社会(と個人)の認識が単純な因果論となっている、もしくはそのような単純化にならないためにどのような認識手続きや手段が必要なのか、そうしたことについてもっと紙幅を割いて書いてほしいと言いたいようだ。

本文は、犯罪がなぜ起こるのかについて、それをおもに犯罪者の行動心理がいかにか形成されるかに焦点を当てて説明を試みている。その際に、本文の著者は、これまでの社会や個人が持ってきた犯罪に対する認識の「単純さ」やマスメディアを通じての「単純化」、とくに社会的な因果関係のみを強調する見方を批判して、それでは犯罪者の心奥に迫れないとして、エビデンスに基づく心理分析という持論を展開している。つまり、著者は、犯罪に対する社会や個人の単純化された認識をただしてより深めるためにも、犯罪行

動の「心理」学研究を発展させる必要があると説いているのである。したがって、評者が望むような、社会的因果関係それ自体がどうかとか、社会認識のあり方、例えばメディア報道のあり方それ自体を議論しているのではない。このような問題は、著者の専門とする心理学ではなく、社会学など他の社会科学分野が担うべき課題であろう。

このように、評者は、著者が因果論的な見方の事例を文献中でどのように位置づけているかを十分理解せずに、心理学以外の分析を要求してしまっている。しかし、著者がそうした事例を批判的に持ち出したのは、心理学的分析の重要性を浮き彫りにするためであった。これは確かに評者の読みの「浅さ」ではあるが、犯罪行動の持つ多面的な要因ゆえにより全面的に犯罪をとらえたいという、それ自体としてはまっとうな「欲求」の表明ともみなせる。とすれば、この点は本文の「不足」としてではなく、評者がこれに触発されて今後自分の研究課題とすべき論点として記述すればよかったものと思われる。」

評者には是非この懇切なコメント(全文)を踏まえて書評対象図書を再読してもらいたいところだが、筆者としては、最終段落のまとめ方に感心し、読んでみようという気を起こさせられたことを告白しておく。(エピソードのドストエフスキー『罪と罰』からの一節は予想できていた?)

アリヤマン・ダルミア著『バフェットとグレアムとぼく』、これだけで内容を把握できるのは、おそらく投資家だけであろう。副題「インドの13歳の少年が書いた投資入門」で一気に興味がわく。投資家ならずとも「何コレ?」となる。編集陣の勝利である(前田俊一訳、阪急コミュニケーションズ、2011年)。さらに言うならば、「まだ実際には投資していない13歳の少年」は実質的にはこの出版によって投資活動を開始している。印税とは配当金の一種であろうから(と素人考え)。加えて審査委員からは次のようなより専門的コメントも寄せられている。評者、柝澤大助氏の参考になれば幸いである。

「書評の冒頭に、「アベノミクスにより、長いデフレからインフレに移るなか、資産形成も貯蓄から投資へ変えようという動きになっている」とある。目標のインフレ率に到底及ばない現状では、インフレに移ったか、大いに疑問が残る。また、「貯蓄から投資へ変えようとする動き」に関して、外資に支えられた株高が主体であり、日本の個人投資家が増加した株高ではない。日本の家計における資産形成を貯蓄から投資に変わろうとしている、というにはいささか早計である。本の書評は、本の内容をよく把握しており、的確である。なかでも、本の中核であるバフェットの投資に必要な性格的特性を取り上げ、適切なコメントを述べている。」

以上3編、政治・(臨床?)心理学・経済と続いたところで文学が来るといささかホットする。勝手知ったる小説の世界、逆にそれ以外の分野の読書には多少の緊

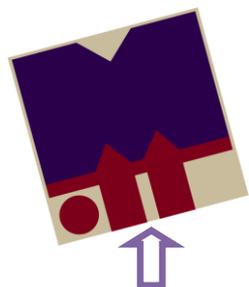
張が伴っていたことに気づかされる。キャラクターとストーリー+感想乃至批評、書評要件もパターン化して、書きやすいのではなからうか。しかも作品は基本的に虚構世界であり、現実そのものより対応し易く、しかも現実から遊離しきるのでない。旧い言い方だが「虚実皮膜の間」にこそ小説の魅力があるだろう。さらにパロディーと言おうかパスティーシュと言うべきか、文学的伝統に乗ったヒネリの妙味もある。

川村元気著『世界から猫が消えたなら』マガジンハウス(2012年)は明らかにゲーテの『ファウスト』などが下敷きになっている。悪魔メフィストフェレスとの契約で永遠の若さを手に入れるファウストの物語がよりファンタジックに転生しているが、基本構想は一緒である。一日延命の代償として、何か一つをこの世界から消去するという悪魔との契約の物語。審査委員の一人から評者、酒井佑実さんに以下のメッセージが寄せられている。

「本著は、『電車男』や『告白』など若者文化に社会現象を巻き起こしたことで有名な川村元気氏によって手がけられた。本著は80万部を突破するほどの大ベストセラーとなり、すでに映画化されることが決まっている。その主人公を佐藤健が演じることで話題となった。本著は、主人公である30歳の郵便配達員が父親に向けた遺書として、余命一週間の出来事を物語モードで綴っている。その点では、主人公の恋愛観、親に対する思いや葛藤が等身大の体験として、評者には共感的理解が可能となったと思われる。

書評については単に内容紹介や感想に終わらず、自身の日常的な生活体験に引き寄せながら、自己の見解を述べている点で説得力があった。しかし、本著が「僕」という主人公が「あなた」という父親にあてた遺書である点に着目し、なぜその宛先が「父親」だったのかを評することで、より本著を深く味わうことができたと思われる点が残念である。

最後に、評者が評末に記した「私は『本書』から、たった一度しかない人生を『自分で』切り開いていく勇気をもたらした」という言葉にエールを送りたい。」



『MOTTちゃん』

【優秀書評賞】

「終戦詔書と日本政治：義命と時運の相克」

13N0040 前川 明(社会人聴講生)

今年は戦後70周年、その原点は8月15日正午にポツダム宣言受諾と戦争終結したことを天皇が国民に知らせた、いわゆる玉音放送である。しかし、その放送で読み上げられた「終戦詔書」について、私には「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」以外は印象にない。本書を選んだ理由は、終戦詔書が長崎の原爆投下以後、短期間に作成された過程や背景や内容、そしてその後今日に至るまでの政治への影響を知りたくなったためである。

著者老川祥一氏は、自著について「詔書の作成過程で展開された政府部内のせめぎあいが、日本の政治にとってどんな意味を持っていたのかといった考究に(中略)照明を当て、そこから現代日本の政治が直面している病理の遠因を探ろうという試み(138頁)」と語っている。

5章からなる本書は、第1章では終戦での指導者の右往左往ぶりは、終戦詔書作成過程の混乱の原型となると述べている。2章は終戦詔書と原案類に沿い終戦詔書作成過程の変遷をたどったあと、「義命の存する所」から「時運の赴く所」の変換は日本政治の病理を象徴する出来事と見なし、政治の無責任が現れたとしている。第3章では終戦詔書と草稿を通じて、阿南陸相の自決や民主党政権等の無責任の様々なあり方を紹介している。4章では無責任現象の原因について制度の欠陥か、政治家の資質か、政治の経年劣化によるのかを考えたあと、制度に人が使われると目的と正反対の失敗を招くことを事例で示している。5章は冷戦の崩壊とグローバル化の中で現在の国際秩序が急速に崩れつつあるので「時運の赴くまま」の成り行き任せの政治では限界があり、国際的な説得力を持って自国の立場を堂々と主張し行動しなければ国家の安全も尊厳も守れないと結論付ける。

本書の良い点は、終戦詔書作成過程に見えた「政治の無責任」の見解について、政治学の大家丸山眞男に対して著者が違和感を唱えていることである。丸山はイデオロギーの面からそれが日本政治の宿命であり、文化的後進性で常時どんな局面でも誰にでも現れるとするのに対し、著者は政治の変動のサイクルのなかで衰退時に劣化現象として出現するとし日本固有の物でないと述べている。私が思うのは、両者は同じ「政治の無責任」を観ていても出発点が違うので比較不能とも言えなくはないが、やはり政治も経済と同様に起伏パターンの循環という実態があるため著者の見解を支持したい。

良くない点は、3章4章の構成に整理不足を感じる。その理由は第1に、3章4章のねらいについて7・186・254頁を参考にすると、終戦詔書のドラマから日本政治の「無責任の構造」を見出し、事例をもとに政治過程の検証をしたあと、無責任現象の原因を①時代の

背景や変化か②指導者の力量か③制度的要因かを考慮し、政治の本来あるべき姿を問い、歪みの理由や改革の方法を考えるとしているように思う。これを一連の作業とみれば、3章4章を1章分にまとめ第3章にし、第1章ミミズクと弾痕を「起」、第2章義命と時運を「承」、新たな第3章を「転」、現第5章時運主義の限界を第4章にして「結」にできないかと思う。第2に、3章4章にわたり複数の重複項目がある。特に、民主党政権の無責任の記述は詳しすぎる。私も民主党政権の無責任さを否定はしないが、この書き方は、著者が保守系全国紙読売新聞に属する立場に基づくものか。ちなみに巻末の人名索引によると、「菅直人」は6箇所11頁「鳩山由紀夫」は8箇所14頁に及ぶ。この点からも、3章4章を1章分にまとめることもできよう。

最後にこの書評を終えるにあたり、私事で恐縮だが著者に感謝したい。40余年前私は政治学科の学生だったが、当時起った大学紛争のため思うように学べなかった、いやそれを理由に遊んでいた。ただ、丸山先生の『現代政治の思想と行動』だけは多少読んでいて、今日まで日本政治の特色は無責任であるという固定観念を持ち続けていた。今回著者老川氏の丸山説への違和感を読んで、また別の角度から「日本政治の無責任」を学ぶことができたと思う。

「バフェットとグレアムとぼく：インドの13歳少年が書いた投資入門」

柄澤 大助（市民利用者）

日本では株をやっているという白い目で見られる。しかし、アベノミクスにより、長いデフレからインフレに移るなか、資産形成も貯蓄から投資へ変えようという動きになっている。そこで私も遅ればせながら投資を学ばなければいけないと感じ教科書を探していた。そんな中、今回この本を取り上げたのは、「インド」と「13歳」という点である。これなら、株の初心者である私でも、インドの何か不可思議なやり方で、中学生レベルの投資初心者にも分かりやすく教えてもらえるのではという安易な考えからである。題材には有名な「バフェット」という一代で投資により世界の大金持ちになった人と、「グレアム」というバフェットが師と仰ぐ人を取り上げている。

本の内容は、まずグレアムについてである。主に彼の著作から得られる重要な投資への考え方のエッセンスがまとめられ記述されており大いに参考となる。要点は十分な分析を行えば安全にリターンが約束されるということである。

因みに、この本の語句の注釈は各ページの下部分に解説されており、いちいち最後の方のページをめくる手間を省いている。また、各章のまとめをポイントとしてそれぞれ書き出して頭に入りやすいようにしている。これらの記述方法にみられる13歳の著者による合理的な思慮には驚かせられる。

続いてバフェットについては、彼がグレアムから得て行ったことを主体に解説をしている。この部分についても簡潔にポイントを絞って要領よく、わかりやすく記述されており非常に参考となった。つまり、株を買う際には、企業の価値を調べる。具体的には、事業という「城」を取り巻く「堀」が大切で、魅力的な投資先というのは、4つのお堀を持っている。1ブランド2低コスト3独占4感動的なサービスこの4点から企業を調査するのである。そして、「安全余裕枠」という公正な価格より低い値段の時に買う、つまり、市場は必ずしも効率的ではないから、株価が下がった悪い市場状況の時、その企業に投資する。弱気の市場こそ買いの絶好のチャンスであり、市場は周期があるのでそこを確実にとらえること。そうすれば、すごいリターンを得ることが出来る。そして、それを長期に保有するということである。株価は感情的に不安定な人からの申し出と同じ、それに影響されず、自分で事業を分析することが大事であると述べている。

著者は、バフェットが投資に必要な三つの性格的特性つまり客観性、シンプリシティと、意欲を備えておりそれが投資には必要だと分析している。事実をもとにして意思決定を下すこと、物事を単純化する能力があること、そして、物事をなすとげようとする情熱と自らの投資哲学に対する確信を持つことである。その他、株式市場に投資するのではなく事業に投資をする、かつ複利のパワー（長期保有することによって得る）、良い会社が必ずしも良い投資とはならない等多くの投資の示唆を解説している。その他実践編としてインドの実例を交えて記述し、理解を深めるように構成されている。

全体としては、バフェットに関して数多く出版されている分厚い本に比べ本当にエッセンスの部分だけをまとめて解説しており、短時間で投資に対するいくつもの重要な思索を得ることが出来る素晴らしい本だと感じた。

インドにおける13歳の著者がすでに投資に対してこれだけの知識を持ち、それを分かりやすく他人に解説できるのは驚きであるとともに、全体を通してのまとめ方から物事に対する分析力やそれを生む理解力にも驚かせられる本であった。これは現在欧米の重要な企業に多くのインド人がCEO等として就任している事と無関係ではないことが、訳者のコメントとしてあったが全く同じ印象を受けた。

残念ながら、著者は当然まだ実際の投資をしていないので、著者自身の投資方法についての記述はなく、著者はこれらの教を現実の世界でやっていけるかは本人次第だとまとめている。投資方法は分かった気がするが、世の中そううまくはいかない人が大半という投資の世界では、ほとんどの人が三つの性格的特性のいずれかが欠けているということになる。13歳の著者は今後この三つの性格的特性を備え鍛えていく方法を学んでいくのであろう。近々の次回作を期待する次第です。

【佳作】

「世界から猫が消えたなら」

酒井 佑実（社会学部3年次生）

この物語は余命宣告を受けた僕に、僕の姿をした陽気な悪魔が取引を持ちかけるところから始まる。その取引とは「この世界からひとつ何かを消す代わりに、1日の命を得ることができる」というものであった。悩んだあげくに僕はその取引に応じ、僕の命と引き換えに、世界から電話、映画、時計が消えてしまった。僕の最後の電話の相手となった、初恋相手である彼女。100%全身映画オタクで、僕とは10年以上の付き合いであるツタヤ。僕の母さんが亡くなってから一度も話していない、時計屋を営む父さん。僕の姿をしているが、服の好みが正反対の悪魔。4年前から僕と2人暮らしをしている猫のキャベツ。この物語では、僕と彼らの不思議な7日間が描かれている。

主人公である僕は、自分の命のために世界から1つずつ何かを消す中で、その消してしまったモノたちが、今の自分を形作っていることに気付く。例えば世界から映画が消える前、友人であるツタヤに最後に観る映画をいっしょに選んでもらう場面があるが、今まで観てきた無数の映画と、その映画に結びついている思い出たちがかたどっている姿こそ、僕そのものであるということに気付く。私たちは日々生活する中で、まわりにあるモノを当たり前のように感じ、その大切さに気付かずにごろしている。『「何かを得るためには、何かを失わなくてはならない』』。これは本書で何度も出てくるセリフであり、主に母さんが生きていたときの口癖として登場する。私たちはまわりに存在するモノの大切さに気付かずに生活し、失って初めてその大切さに気付くのだ。その「大切さ」を知る（得る）ためには、その「大切な」ものを一度失わなくてはならないのかもしれない。悲しいことであるが現代のような、モノが溢れている世の中であれば、そうでもないと思ふことができないうだろう。

私たちを支えているのは、モノだけではない。日常で関わる多くのヒトも、私たち一人ひとりを支えている大きな存在なのである。この物語の中で僕を支えていたヒトの中心として、母さんと父さんが描かれている。母さんが僕に、死ぬ間際に書いた手紙には、僕の素敵なところが10箇所書かれていた。また僕が死に向けて身辺整理をしたとき、僕は父さんとの思い出が詰まった宝箱を見つける。僕は気付かないうちに彼らに支えられており、彼らは僕を形作る、重要な存在となっていたのである。

書名が『世界から猫が消えたなら』であるが、結局僕は世界から猫を消さずに、僕が世界から消えることを選んだ。ではなぜ著者は、書名に電話や映画、時計を選ばずに「猫」を選んだのだろうか。猫は私たちにとって身近な存在であり、ペットとして飼っている人も多いだろう。では、どれだけの人が普段生活していて、そ

の大切な存在がいつか消えてしまうことを想像し、かけがえのない存在を、かけがえのないものとして接しているだろうか。そのことを現代に生きる私たちに問うために、筆者は書名に「猫」を選んだのではないかと思う。

私たちは周りに存在するモノやヒトの本当の大切さに気付かずに生活している。私たちの周りに存在するものが当たり前になってしまい、すぐ近くにあるからこそ、その大切さに気付くことができないのである。また、それらの大切さを知っていながらも、それらを素直に大切にできない場面がたくさん存在する。複雑なこの世界で生きている私たちは、優先順位が誤っていると気付きながらも、大切なものを横において、目の前にある何てことのないものに追われながら、日々を過ごしているのではないだろうか。

たった一度しかない人生。限られた時間の中でどう生きるかは、自分次第であることを本書から学べた気がする。「自分次第」と言われてしまえば、真っ暗な世界に放り込まれた気分になってしまいそうになる。しかし、当たり前のように当たり前ではない幸せを、きちんと噛みしめることができる人は、人から幸せを与えられ、人に幸せを与えることができ、豊かな人生を送ることができるのではないだろうか。私は本書から、たった一度しかない人生を「自分で」切り開いていく勇気を与えてもらった。

「入門犯罪心理学」

大草 みどり（法学部2年次生）

本書では東京拘置所や国連薬物犯罪事務所などで様々な犯罪者と濃密に関わった経験をもつ著者が、殺人、窃盗、薬物犯罪、性犯罪などが生じるメカニズムを解説し、犯罪者のこころの深奥にせまっている。誰もが1度は以下のような疑問を抱いたことがあるのではないだろうか。人はなぜ犯罪を行うのか。多くの人はこれまで犯罪を行わずに生きてきた。それはなぜだろうか。本書はこういった素朴な疑問を丁寧に解説しており、非常に充実した内容となっている。

著者の原田隆之氏はカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校大学院修士課程を修了し、現在は目白大学人間学部心理カウンセリング学科准教授として、主に犯罪心理学、認知行動療法とエビデンスに基づいた臨床心理学を研究している。

本書は7章で構成されている。第1章では大阪教育大学附属池田小学校事件と秋葉原無差別殺傷事件の加害者を例に挙げ、犯罪者が2つのタイプに分かれることを述べつつ両者を比較している。第2章ではそもそも犯罪とは何なのか。また、わが国における犯罪の現状について述べている。第3章では犯罪心理学の進展について過去から現在に至るまでを解説している。第4章では新しい犯罪心理学が、犯罪行動をどのようにとらえ、それが犯罪の予防や治療にどのよ

うに生かされるのかについて述べられている。第5章では犯罪者のアセスメントと治療について細かく解説している。第6章では、具体的に犯罪者治療の実際とその効果について紹介している。第7章ではエビデンスに基づいた犯罪対策を挙げ、今後の犯罪心理学の進むべき方向と犯罪への対処について述べている。

本書の最大の貢献は、犯罪行動の誤った認識について問題提起している点にある。

我々はメディアの影響もあり、加害者が犯罪を行った原因は家庭環境や格差社会、酒に酔っていたからなど、わかりやすい少数のものに限定してしまいがちである。

しかし、それでは犯罪行動を正確に理解することはできないと著者は明言している。

犯罪行動のプロセスにおいて1番重要かつ複雑なのは認知やパーソナリティなどの働きである。客観的なデータを広く綿密に収集し、その関連を科学的に検証することによってはじめて、真の犯罪理解につながると著者は述べている。本書の中で犯罪行動の過度なられていた思考実験を抜粋してみる。『日本の全市町村で犯罪率の調査をしたところ、犯罪率が低いのは、北海道、東北、中部、四国の農村部であり、過疎化した高齢化の進んだ町村で、自民党支持者の多い地域ばかりだった。』これをどう解釈すればよいだろうか。

単純化は危険であると繰り返し主張されている。それは何の解決にもならないからだ。私も今まで家庭環境や貧困などが深く影響を及ぼすために犯罪が起こると思っていたため目から鱗であった。

一方で本書は我々が犯罪行動において単純な思考に陥るまたは陥らないためにはどうすればいいのかについてあまり言及していない。我々の誤った認識で加害者が社会で孤立し再犯を犯す可能性もある。また、我々が犯罪に触れるのはメディアを通してである。メディアによる情報の多くは加害者を取り巻く環境等、社会的な視点で語られることが多い。これでは事件を、親が悪い、社会が悪いなどと単純化してとらえがちである。本書はその点の記述が不十分であったように思う。

本書は入門とうたっているだけあって専門的でありながらも分かりやすく読みやすかった。また、犯罪の理解と防止のために少しでも資することができればという筆者の願いが強く伝わってくる。ここで本書において取り上げ

犯罪がこうした地域で少ないのは、自然が豊かなこと、高齢者が多いことなどが理由であるのではないか、などと考えた方には是非本書を読んでいただきたい。きっと犯罪に対する認識が変わるはずだ。

書評とは・・・「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

<今回の募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後5年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
 - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
 - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
 - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件**(主要項目のみ抜粋)
 - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
 - ・本文は1,500字以上2,000字程度とする。
 - ・A4版横書き、全てを1ページに収める。本文は、40字×50行の設定とする。
- 募集期間** 2015年4月28日(火)～9月30日(水) ●**入選発表** 2015年12月2日(水)
- 授賞式** 2016年1月13日(水) ●**応募点数** 49点
- 入選各賞**
 - ①最優秀書評賞 1篇 表彰状および副賞(図書カード1万円)
 - ②優秀書評賞 2篇 表彰状および副賞(図書カード5千円)
 - ③佳作 5篇 表彰状および副賞(図書カード3千円)

次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)